

に代へて、今や我から進んで花やかな舞臺の正面に、立派に「時代の主役」を勤め上げねばならぬのである。

然かも思へ。技術が主役を勤むる時代は最近決して一時的ではなく、一幕ぎりではないのである。それは今日を契機として、永遠に愈々有力に活潑に進展して、止まざるの必然であり、且つ國家の爲に是非共然かあらしめ

ねばならぬのである。

益々廣まる東亞の大陸を踏まへ、愈々勇ましき東亞の大建設の前にし旺盛なる「土木報國」の信念に生き抜かんことは、蓋しこれからなのであると強く主張したいのである。

滿洲土木學會の設立經過に就て

書記長 佐藤九郎*

發端より設立委員總會迄

滿洲に土木工學及土木技術の中心となる團體を作らうと言ふ意見は随分前からあつた。滿洲土木研究會が道路研究會から發展して行つたのも其顯れの一つである。然し何と言つても我々が日本の土木學會の會員である以上此處に新しい學會を作つて二重の會員となる事も妙な話であるし又不便も甚だしいと言ふ様な點から如何にかしななければならぬとは考へては居たものの、矢張り話が熟さなかつたのである。處が昨春來日本から視察其他で滿洲に來られた斯界の先輩を圍んでの席上等で屢々日本の土木學會の滿洲支部を作つたらどうかと言ふ話が交はされ、滿鐵の幹部の方々も大賛成であると言ふ事で急に話も具體的に進めやうとの運氣になり4月には定款の起草を寺師君、照井君と三人でやれと奨められ勢ひ込んで着手したのであつた。然し日本法人の滿洲支部設立は國の方針として認めぬ、從つて法的活動は出来ぬと言ふ事が明かになつたので、それではと言ふので滿洲独自の人格を持つた法人團體を結成し實質を日本土木學會の支部たらしむる内容を盛るべく、而も滿洲の特異性を強く加味すると共に滿洲と關東州とが打つて一丸となり全體的色彩の濃い新しい發足をせねばならぬとして具體案を進めたのである。此の爲には新京にある同志は度々會

合もし激論も闘はした。

結局本學會を滿洲國社團法人とする事、日本土木學會とは不可分の關係を有せしむる事等を根幹として成案を得、6月7日には此れを携へ武藤、町田、沼田の諸氏と私が奉天に赴き滿鐵の幹部と協議を遂げ完全に意見の一致を見、設立要綱を作製の上當時上京中であつた滿鐵平山理事に送付し日本土木學會に定款案と共に提案協議して頂いた。

此れを切つかけとして事は急速に進展する事になつたのである。當方より提案した定款案については日本土木學會より提携の具體的方策に就て2.3の質議があり其都度滿鐵の方々も協議の上坂田技監の處でどしどし問題を處理し創立總會を9月28日に開催するプランを立てた。次で關東州在住者への諒解は以前より非公式に連絡は取つてあつたが正式に會談の上連絡の必要ありとし新京からは坂田技監と私が奉天からは西川局長が大連に行つて關東州廳の土木部長室に會同を御願して完全に意見が一致本學會の設立準備委員として滿鐵より平山理事西川局長滿洲國側より坂田技監、本間局長の四氏がなられ準備の會合も數度に亘り開催、事は順調に運んで9月初旬次の趣意書を滿洲に於ける土木界の諸先輩の名を以て一般に發表し輝しい門出を約束したのである。

* 工學士 交通郵部邑計畫科長

此の間設立準備委員四氏の御御折、日本土木學會の幹部殊に中村書記長の御盡力は紙上には書き盡せぬ程で本會誕生にあたつての御厚志に對しては深く感謝の意を捧ぐる次第である。

滿洲土木學會設立趣意書

東亞新秩序建設の一翼を擔當し國防國家の飛躍的建設段階に在る滿洲國に於て凡有施策の礎石として重大使命を荷ふ土木事業の進歩發達を圖り以て圓滿なる事業達成に貢獻せんが爲に土木工學の學術振興を期し併て土木工學關係團體の統合を行ひ現下諸情勢に即應せしめ土木報國の眞面目を發輝せしむるを目的とし茲に「滿洲土木學會」を設立せんとす。

本學會は滿洲國社団法人とし滿洲國及關東州在住の日本土木學會員を中心として之を組織し日本土木學會とは緊密不可分の關係を有せしむる爲本學會正會員は同時に日本土木學會員たるものとし且つ滿洲に於ける一元的なる土木工學の學術機關たらしむる意圖の下に別に副會員を設け一般土木技術者の啓發を圖る可く滿洲に在る土木關係者を網羅し新體制としての發足を爲さんとす。

以上の趣旨に基き日本土木學會とは數次に亙り接觸を重ね本學會の設立に際し同學會に於て必要なる定款の變更即ち日本土木學會員にして滿洲國及關東州に在住する者は本學會員たるものと爲す等其他所要の方途を講じ積極的支援を寄せられ之に依り本學會の定款並規則案を得茲に創立發會の運びに至りたり。

以上述ふる處に據り滿洲土木學會の趣旨に對し御賛同被下本學會の使命達成に御盡力あらんことを冀ふ。

康德7年9月15日

滿洲土木學會設立委員（順序不同）

大村卓一	佐藤應次郎	根橋禎二	平山復二郎
田邊利男	西川總一	宇木 甫	鈴木長明
山領貞二	小味淵壁	高木小二郎	河部義朗
高野興作	奥田定一郎	古閑正雄	大竹 章
趙 心 哲	佐藤周吉	桑原利英	大野 巖
中村英城	直木倫太郎	坂田昌亮	本間德雄
近藤安吉	坂上丈三郎	重住文男	武藤吉治
沼田征矢雄	相馬龍雄	近藤謙三郎	鈴木兵一郎

空閑德平	浮洲 實	山田武治	溝江五月
町田義知	中島時雄	後藤憲一	大崎虎二
大石義郎	吉村富之助	丸山悦三	有光壬辰
山形鐘太郎	清水本之助	小柳健吉	梅野 實
永井了吉	長澤圭吾	馬 場 彰	中村貞輔
淺間逸雄	中島洋吉	牛島 蒸	村山末男
土肥 隆	高橋誠一	清水賢雄	川邊謙司
中村謙介	尾山貫一	風間武雄	堀江元一
佐藤 鼎			

發會式を中心として

それは秋晴れの日の事であつた。前記設立趣意書の激を全滿に飛ばし9月23日新京「日滿軍人會館」に會同する者約200名、面上には輝ける歡びが溢れてゐる。

午後1時設立委員總會を開催し坂田昌亮氏の経過報告定款並規則案審議も滞りなく終了續いて役員の選舉を行つた結果下記の通り第1回の役員が定まつた。

會 長 佐 藤 應 次 郎
副會長 平 山 復 二 郎
同 坂 田 昌 亮

評議員 桑原利英、田邊利男、○西川總一、浦要治、山内丈夫、
○本間德雄、○武藤吉治、○町田義知、沼田、征矢雄、佐藤九郎、高橋誠一、永井了吉、風間武雄、

(○印理事)

2 創立總會（午後2時10分）

一、開 會

二、役員挨拶、佐藤會長挨拶す

三、名譽會員推挙

全員一致大先輩として功績に輝く次の三氏を推挙した。

大 村 卓 一 氏
直 木 倫 太 郎 氏
梅 野 實 氏

四、事業計畫説明

五、豫算説明

六、閉 會

3 發會式

一、開會

二、日滿國旗に對し敬禮

三、護國の英靈に對し感謝黙禱並出征將士の武運長
久祈願

四、土木關係殉職者に對し黙禱

五、會長式辭（別項の通り）

六、祝辭（別掲の通り）

關東軍參謀長

總務長官

民生部大臣

交通部大臣

關東局總長

日本土木學會代表

祝電

內務省技監谷口三郎氏外16名

七、記念講演

次の二氏が特に本學會の發會を祝福し技術家としての心構への問題に就き極めて感銘深き講演をなされた内容は本誌に別途掲載する豫定である。

1

眞田秀吉氏

2 滿洲土木學會發會に際し

直木倫太郎氏

八、映畫

躍進滿洲の根幹として又文化滲透のルートとして伸び行く鐵道と道路の使命は大きい。滿鐵提供の「建設工事」と交通部提供の「北滿に伸る道路」とを映寫し逞しい建設譜の息吹きを滿喫した。

九、閉會

記念すべき創立總會、發會式も右以上プログラム通り順調に進んで感戴の會を閉ぢたのは6時過ぎであつた。

4 懇親會

全滿より又大連より會する者100名近く午後7時大和ホテルの大宴会場を埋めて先づ佐藤會長の挨拶に會は開かれた。輝くシャンデリヤの下、和氣堂に溢れて歡談のひと時は土木滿洲の縮圖とも言い度い祝囃すべき夕である。デザートに入り濱江省相馬廳長の含蓄深きテーブルスピーチを始め滿鐵平山理事の一席、交通部黒田科長の熱を籠めた演説等々意義ある懇親の夕は散ずるも惜しき和かきにて、名残の快を別つたのは9時も半ば過ぎの頃であつた。

祝辭

茲ニ滿洲土木學會ヲ設立セラルルニ方リー言所懐ヲ述フルノ機會ヲ得タルハ欣幸トスル所ナリ。

惟フニ土木事業ハ諸建設並産業開發ノ基礎ニシテ殊ニ滿洲ニ於テハ國家建設ノ先驅的使命ヲ以テ重要ナル部門ヲ占メ國防交通並生産力擴充等ニ重大ナル貢獻ヲナシツツアルハ周知ノトコロニシテ其ノ實績ノ如何ハ直チニ國策ノ遂行ニ重大ナル影響ヲ與フヘキハ諒ナリ而シテ眞ニ生命アル土木事業ノ遂行コソ東亞新秩序建設ノ爲確乎不動ノ礎石ニシテ土木學並土木技術ノ發達ト之ニ基ク忠實ナル施工トハ根幹タリト信ス。

從來滿洲ニ於ケル科學ノ進歩ハ世界ニ於ケル科學並文化ノ進運ニ伴ヒ主トシテ日本ニ負フトコロ大ナリト雖モ

氣候風土民族ヲ異ニシ施工ノ基礎的條件ニモ特異ナル事情カラサルト共ニ一面其ノ歴史ト相俟チ支那古來ノ土木並露西亞ノ土木ニモ學フヘキ點ナシトセス宜シク世界ニ於ケル土木學ノ進歩ニ遅レテ常ニ日本トノ緊密ナル連繫ト切礙砥礪トニヨリ其ノ發達ニ寄與スルト共ニ大ニ實學ノ本領ヲ發揮シ大陸獨自ノ土木學ノ新天地ヲ開拓シ日滿土木業界ノ技術的向上ニ貢獻セラレシコトヲ希望ス。

特ニ滿洲ノ土木ハ高度國防國家體制ノ強化ヲ中核トシ交通並産業開發ヲ翼トスル諸建設ニ特異ノ重點ヲ形成シアルニ鑑ミ土木學ノ發達モ先ツ以テ滿洲ノ事情ニ適應シ其ノ建設目的ニ即應スル部面ニ於テ格段ノ努力ト精銳ナル睿智トヲ發揚シ以テ日滿一體ノ國家目的ニ歸一セラレムコトヲ望ム。

今ヤ世界ノ列強ハ大動亂ノ渦中ニアリ競ツテ科學及技術ノ進歩發達ニ熱中シ其ノ總動員體制ヲ完成シ以テ世界ノ爭霸戰ニ對應セムト努メツツアリ此ノ秋ニ方リ全滿洲土木學界ヲ動員シ打テ一丸トナリ日滿不可分ノ關係ニ於テ本學會ノ設立ヲ見滿洲ニ於ケル科學總動員態勢ノ打成ニモ一步ヲ進メラレタルハ洵ニ時宜ニ適セリト謂フベク慶賀ニ堪ヘサルトゴロナリ希クハ滿洲建國ノ本義ニ則リ將來益々學會同人ノ融和團結ヲ致シ崇高ナル國家目的ニ向ヒ學術ノ研究ニ努メ以テ日滿兩國ノ發展ト東亞新秩序ノ建設トニ貢獻セラレムコトヲ。一言以テ祝辭トナス。

昭和十五年九月二八日

關東軍參謀長 飯 村 穰
祝 辭

國家百年ノ長計ヲ樹立シテ之ヲ凡百ノ施設ニ具現シ國力ノ充實ニ國防ノ強化ニ小大ノ規模一トシテ整備セサルハナク治ニ處シ變ニ應シテ餘裕ノ常ニ綽綽タルモノアルハ實ニ經國ノ要道ニシテ今日ノ急務亦之ニ過クルモノ有ラザル也。

茲ニ本日ヲ以テ其ノ發會式ヲ舉行セラレタル滿洲土木學會ハ其設立ノ趣意タルヤ東亞新秩序建設ノ一翼ヲ擔當シ國防國家ノ飛躍ノ建設階段ニ在ル滿洲國ニ於テ有スル施設ノ基礎タルヘキ土木事業ノ進歩發達ヲ圖ルト共ニ之カ事業ノ達成ニ貢獻セントメ土木學界ノ振興ヲ期シ並ニ關係團體ノ統合ヲ行ヒ現下ノ情勢ニ即應シテ土木報國ノ眞精神ヲ貫徹セントスルニ在リ是レ實ニ今日ノ滿洲國ニ於テハ時勢ニ即應セル急務中ノ急務ニシテ其設立ノ一日モ等閑ニ附スヘカラサルモノナリシニ今ヤ斯界ノ權威者ニヨリテ之カ設立ヲ提唱サレ廣ク同志ヲ其國ニ求メテ其團結ヲ鞏固ニシテ一途目的ノ貫徹ニ邁進セラレントスルハ獨リ我カ滿洲國ノ爲メ其發展ヲ祝福スルノミナラズ東亞ノ爲メ期待スル所ヤ重シ翼クハ同心協力土木報國ノ眞義ヲ光大發揮シテ實功ト實績トヲ擧ケラレンコトヲ厚ク望ミテ祝辭トナス。

康德七年九月二十八日

國務院總務長官 武 部 六 藏
祝 辭

本日在此舉行滿洲土木學會發會式親與在留我國及關東

州之日本土木工學界之權威者相對得諸表祝意之機會實本職引爲欣快者也。

深惟設立本學會之目的乃在於期圖我國土木事業之進歩發展並土木工學之學術振興而就合土木工學關係團體使其適應現下之諸情勢以期鞏固我國防國家之基礎負起建設東亞新秩序之重責其使命之重大自不待言本日遂發有此會式實爲不勝欣慰者也。

詳察本學乃以滿洲國及關東州在住之日本土木學會員爲中心所組織之滿洲國社團法人機關本學會之正會員亦即日本工學會之會員故本會與日本土木學會當然有密切不可分之關係此於日滿一體一心共同防衛之國是之下頗堪稱爲切要之舉也。

諸會員諸位鑑於使命之重大共同協力向前研鑽邁進於我國之土木建設文化上能有莫大之貢獻爲所深望者。

聊陳蕪詞以表祝意

康德七年九月二十八日

民生部大臣 呂 榮 實
祝 辭

今值舉行滿洲土木學會發會式之際、親得參加、並能申述祝辭乃本人最感欣快者。

回顧土木學業之盛衰、於國土之開發、及民生之向上、所受影響之大、此無須贅及、故我國當局、自建國以來、即鑑于土木事業、有振興之必要、以銳意努力、繼續進行各般產業之開發、與民生之向上、現今建設東亞新秩序之聖業、以盟邦日本爲中心、已着着於進行之秋、而我滿洲國爲其一翼、實現高度國防國家之體制、及遂行綜合立地計畫、以確立東亞自足之經濟等、其責任之遂行、乃刻下當務之急、處於此間、土木事業之任務、不得不謂愈感重而且大矣。

當此之秋、踴躍在滿土木界之權威者、實現滿洲土木學會之創立、事實乃爲對處現今之諸情勢、並於建設東亞新秩序之前途、又增一番努力、此不勝欣悅之至。

對於會員各位、希以淵博之學識、及宏富之經驗、於非常時局之下、益爲奮勉、並祈貴會之發展、略述數語、以爲祝辭。

康德七年九月二十八日

交通部大臣 李 紹 庚

祝 辭

本日茲ニ滿洲土木學會發會式ヲ舉行セラルルニ當リ一言所懷ヲ述ベ祝辭ニ代ニ度イト存シマス惟フニ土木事業ハ凡有施策ノ礎石トシテ重大使命ヲ荷フモノデアリマシテ之ガ事業ノ成否ハ國勢ノ消長ニ影響スル所極メテ大ナルモノガアリマスコトハ今更贅言ヲ要シナイ所デアリマス殊ニ今次支那事變ヲ契機トスル皇國ノ飛躍的發展ニ對處センガ爲ニハ日滿支ヲ通スル産業開發ノ基礎トナルベキ幾多ノ重要ナル施設ヲ必要トスルノデアリマス此ノ秋ニ當リ滿洲土木學會設立委員ハ夙ニ是ノ點ニ著意セラレ本學會ヲ設立シテ土木工學ノ振興ヲ期シ以テ斯業ノ進展ニ資セントセラルルハ實ニ慶賀ニ堪エマセン今ヤ時局ハ重大デアリマス即新東亞建設ノ聖業ヲ完遂スルガ爲皇國ヲ中心トシ日滿支ヲ通スル國防國家體制ノ確立ヲ第一義トセラルルノ秋ニ當リ本會ニ負荷セラレマス使命ハ實ニ重要ナルモノアリト信ジマス。

何卒關係各位ニ於カレマシテハ向後一層會務ニ盡瘁セラルルト共ニ土木工學ニ關スル研鑽ヲ遂ゲラレンコトヲ切望スル次第デアリマス一言蕪辭ヲ述ヘテ祝辭ト致シマス。

昭和十五年九月二十八日

關東局總長 大津 敏 男

式 辭

本日茲ニ滿洲土木學會發會式ニ當リ一言所懷ヲ述ブルハ余ノ光榮且ツ欣快トスル處ナリ。

昭和十二年七月蘆溝橋事件ニソノ端ヲ發シタル北支事變ハ第二次上海事變ヲ經テ遂ニ全面的ノ支那事變ニマデ擴大サレ事變勃發以來今ヤ三年三箇月ニ垂ントス。今回ノ事變ガ東亞新秩序建設ノタメノ聖戰ナルコトハ斷ルマデモナク現ニ日滿支三國間ノ提携建設ハ着々ト進行シツツアリ此ノ秋滿洲ノ受持ツベキ役割ニツキ地理的及歴史

的ノ何レヨリ考察スルモ極メテ重且ツ大ナリト言フベシ。

惟フニ東亞共榮圈ノ確立ハ日滿支三國間ニ於ケル國防經濟及文化ノ全面的提携ニヨリ達成サレ得ベク而シテ之等根本諸策施本礎石トナルベキモノハ正ニ土木事業ニアリト言フベシ茲ニ滿洲ニ於ケル土木事業ノ崇高ナル使命ハ存ス。

土木事業ノ基礎トナルヘキ土木工學ハ正ニ綜合工學ト言フベキモノナリ鐵道、港灣、水力發電、河川、道路、上下水道、都市計劃等其ノーツツニツキ専門的研究ノ必要ナルコト勿論ナレド同時ニ其等各部門ノ有機的綜合コソ最モ肝要ナルコト明カナリ茲ニ我カ土木工學團體ノ統合ヲ必要トスル所以アリ地理的及經濟的ニ見テ日滿支ノ樞軸タルベキ滿洲更ニ歷史的ニ見テ新生支那ノ將來ニ光明ヲ與フル滿洲事變後ノ發展滿洲、斯クノ如キ滿洲ニアツテ東亞新秩序建設ノタメノ礎柱タルベキ決意ト誇ヲ有スル吾等在滿土木技術者相寄り茲ニ滿洲土木學會ヲ設立ス。

其目的トスル處土木工學ノ學術振興ヲ期シ併セテ土木工學關係團體ノ統合ヲ行ヒ現下諸情勢ニ即應セシメ土木報國ノ眞面目ヲ發揮セシメントスルニアリ。

滿洲土木學會ト日本土木學會トノ關係ハ尙滿洲國ト日本國トノ關係ノ如シ一總一心ノ國是ヲ經トシ全東亞ヲ敞フ發刺タル土木精神ヲ歸トナシ兄弟ノ義ヲ以テ協調研鑽相共ニ俱ニ現下ノ飛躍的建設段階ニ邁進セントス。

願クハ會員各位本會設立ノ趣意ヲ體セラレ益々奮勵研鑽以テ土木事業ノ進歩發達ヲ圖ラレンコトヲ切望ス一言蕪辭ヲ呈シテ式辭トナス。

昭和十五年九月二十八日

滿洲土木學會長 佐藤 應 次 郎